

令和7年7月12日

おはようございます。先程薛さんに素読とお話をして戴きました。とても良かったと思います。特に「徳は孤ならず、必ず隣あり」は印象に残りました。皆さんのお手元にも資料があると思いますが、これを作って戴いたことで、分かりやすく理解できました。

日本語で読んでいると、それが当たり前だと受け止めていますが、中国語で読むと最初は全く意味が分からず、理解不能に感じるものです。大昔の日本人は、その分からない言葉を耳で聞き、文字を見ながら、これはどう読むのか、どういう意味なのかを一生懸命考え、研究してきました。そして、その考え方を日本流に消化し、自分たちのものとして血肉化していったのです。

これは本当に素晴らしいことだと思います。薛さんはそれを図らずも体現して下さったので、良いお話でした。

「子 川の上に在りて曰く、逝く者は斯くの如きかな。昼夜を舍かずと」について、薛さんの川を流れる水はエネルギーそのものであるという解釈は論語を研究している学者からあまり出てこない解釈です。珍しく新しい視点で大変良かったと思います。

この言葉を少し掘り下げてみると、孔子は年を重ね、人生の終わりを意識しながら、流れる川を見つめていたと考えられます。水の流れを見れば、誰しも川は絶えず流れていると感じるでしょう。しかし孔子はその流れを見て、命や時間の移ろいに思いを重ねたのです。目の前の水は絶えず動き、昼も夜も休むことはありません。それを見て、自分の時間もまた途切れることなく流れ、やがて尽きるが、自分の考えは後継者に受け継がれ続けてゆくという感覚を抱いたのでしょう。

古い注釈では、この言葉を孔子の老いと人生の無常に対するため息と捉え、人間は誰でも死ぬもので、孔子も同様に人の子なのだとする解釈が主流でした。やがて時代が進み、朱子が現れると、孔子は偉大な先生なので、これは学ぶという考え方で捉えた方が良いでしょうとしました。

学ぶ者は、生涯を通じて知を追い求め、その成果を次の世代に伝える。それを受け取った人は、自らの理解を新たに加え、さらに次へと引き継いでいく。学びは川のように絶えず流れ続け、人から人へと受け渡されていくものだという考え方です。

学者たるものは昼夜を問わず考え続け、学ぶことの流れを止めてはならない。川が一瞬も止まらないように、学びの流れも絶え間なく続くべきである。そのように学びを解釈した人々は、素晴らしいと感銘を受け、学びへの意味合いを深めて次の時代へ繋いでいくでしょう。

後世に、薛という学者が水はエネルギーであると喝破した、となるかもしれませんが。エネルギーとして捉えると、また違った説明解釈ができます。ですから薛さんのお話は、良い視点を開いたものだと思い聞いていました。

本日は中国語での表記もあります。文字を眺め、その成り立ちを考えることは大変良い事ですので、ぜひご覧下さい。本日の素読は、そのような意味でも非常に意義深く、今後さらに深く掘り下げていくと良いですね。

論語解説

では、改めて論語の解説に参ります。

し いわ とく こ かなら りん あ
子 曰く、徳は孤ならず、必ず鄰有り。 里仁第四【25】

徳を身につけ、徳と一体化した人は決して孤立せず、慕う人が周りに集まるという意味です。洪澤栄一の解釈によれば、その代表として中江藤樹を挙げています。中江藤樹は徳を実践し、人々から尊敬と信頼を集めた人物でした。その徳に引き寄せられるように、多くの人が彼のもとへ集まったといえます。同じように、二宮尊徳も徳が身についた人でした。

少し話題を変えます。孔子や朱子の時代、もちろんコンピューターはありませんでしたが、現代ではパソコンやタブレットが当たり前になりました。文明の進歩で便利になったと言われますが、実際は不便な面もあります。

私も移動の際に iPad を持ち歩きますが、重くて大変です。便利な筈なのに、スマホにメールの通知が絶えず届き、人と話している最中でも対応しなければならない。結局、便利になるという事は、同時に不便な事であると思っております。

昔は文明開化と言いましたが、文明や文化が進むということは、良いことばかりではなく、当然悪いことも起こります。従ってものごとは、両面から見ていかなければならないと感じています。

急に話が脱線したのは、今のパソコンは、人類にとってどんな価値を持っているのだろうと考えることがあります。年配の方、若い人も含め、今生きている人々は自由にパソコンを扱えないと、これからの時代生きていく事が難しくなるでしょう。

さらに進化すると、私ではとても追いつけません。ですから、会社の若い人たちに「これ、ちょっと頼むよ」と助けてもらうことがあります。周りにそういう人がいないと、本当に大変だと思います。

政府の言い方を借りれば、中小零細企業で社員の給料を上げられない会社は撤退して戴く時代に入ったと言っています。「給料を上げられない会社は潰れなさい」ということです。これをパソコンに置き換えれば、パソコンを使いこなせない人は、もう少し人生を楽しんで、あの世へ行って下さいという話になります。

そういう時代の中で、私はまだ足掻いております。自分の力で出来ない事は、周囲の力を借りながら、なんとか付いていこうと思っています。

私が困って助けを求めると、困っているなら手伝いましょうと人が集まって来てくれます。徳は身につけておくほうが良いと感じています。

渋澤栄一は、徳は孤ならず、の解説で中江藤樹と二宮尊徳を代表として挙げていますが、中江藤樹にはこんな逸話があります。

藤樹先生の家の前には小さな川があり、先生が川を手入れし綺麗な小川に変わりました。そこに魚が泳いでいると良いなあと思っていると、その心を察したお弟子さん達が鯉を放しましたが、夜になると誰かがその鯉を盗んでしまいました。

鯉を放しても度々盗まれてしまうので、弟子たちは腹を立て、泥棒を捕まえようと夜通し見張りをします。やがて泥棒が現れ、弟子たちは厳しく叱りましたが、藤樹先生はそんなに怒ることはないと言って諭しました。鯉を盗む人にも事情があるのだから、と罰することなく許したのです。

新しく鯉を放しては取られ、放しては取られ、を繰り返しました。ついに弟子たちは泥棒に「鯉がいて先生が喜ぶからもう取らないでください」と土下座して頼みました。そのやりとりを重ねるうちに、やがて鯉が定着し、常に小川が流れるようになりました。罰を与えるのではなく、周囲がその徳に打たれて行いを改める、そのような話が中江藤樹について語られています。

徳について現代でも同じことが言えます。パソコンを自由自在に使いこなせる人と、使いこなせない人。使いこなせなくても、徳のある人は周りに必ず助けてくれる隣人がいる。そう考え、今回の素読を解釈しましょう。

渋澤栄一は中江藤樹や二宮尊徳だけでなく、帆足万里のような徳の高い学者にも注目していました。そうした人物の周りには、学びたい、知りたいという人々が自然と集まってきたのです。

先程の話に付け加えると、自分の周りに同志や仲間がいなくて寂しい、そういう時は大概、心が萎えてきます。自分を自分で叱咤激励する時、心が萎える時、自分でこれだと思えるものがあれば、それを一生懸命やっていると、きっと誰か応援する人が出てくる。そのようにこの言葉を励みとして使えばよいでしょう。

私は一昨年の年賀状で、或る方からこの文字を書いた年賀状を戴きました。現在体調が芳しくなくお休みしておられるようですが、その年賀状にこうありました。

「私は今、心が寂しい。あまりやる気が起きない。しかし『徳は孤ならず、必ず隣有り』私はこの言葉を励みにして、今年は頑張ります。」

良い言葉を見つけると、座右の銘にして、心が寂しい時にそれを元に頑張ろうという気力が湧きますから、やはり良いものを見つけるべきですね。その方が回復されましたら、ぜひ来て戴きましょう。そして「徳は孤ならず、必ず隣有り」

その言葉を年賀状に書いた時の率直な気持ちを語ってもらいたいと思います。実際にこういう科白は生きています。

数日前に群馬県のあかぎ信用組合で講演をしました。岡本理事長が中斎塾フォーラムの法人会員を増やしたいと考え、自らの関係先である信用組合の70周年記念行事で私に話を依頼するようお話をして下さいました。

あかぎ信用組合の理事長さんは御挨拶で私共は、二宮尊徳の「五常講」を理念に掲げて活動していますとお話されました、

当日は渋澤栄一の生涯を話す予定でしたが、理念が「五常講」と聞いて、急遽二宮尊徳の話を入れ、渋澤栄一との関わりについても触れました。講演後、理事長さんが二宮先生の話の沢山して戴いて、有難う御座居ましたと言って下さいました。

二宮尊徳は、「仁・義・礼・智・信」という徳を大切にしていました。“仁”とは思いやりの心です。人を思いやる気持ちでお金を貸すことが仁なのです。

次に“義”は約束を守ることです。お金を貸したら、借りた人は必ず約束を守って返す。仁義礼智信の義は、一対一の約束をきちんと守ることを意味しています。

“礼”は感謝の心です。お金を貸してもらって助かった、本当にありがとうと感謝する。二宮尊徳が面白いのは、そのありがとうの気持ちを形に表しなさいと言ったところです。借りたお金で生活が立ち直り、少し利益が出たら、その余分なお金を差し出しなさいと教えました。そのお金を集めてダムを作りましょう。

多くの人が少しずつお金を出し合えば、ダムが大きくなり、そこからまたお金を貸し出していけば、より多くの人が救われる。ただ一対一での貸し借りにとどまらず、みんなが助け合う仕組みを作ろうという考えでした。感謝の気持ち（礼）を形にし、自分が良くなったら次は他の人を助ける。その輪が広がれば、より多くの人が豊かになります。

この仕組みを始めたのは、二宮尊徳が仕えていたある武士の家で困っている人にお金を貸して助けたのがきっかけです。その家は立ち直り、やがて裕福になりました。その評判を聞いたお殿様が、そんな立派な人物がいるなら困っている小笠原藩の立て直しを任せようと言ったのです。

二宮尊徳は時間をかけて、一所懸命に復興させました。小笠原藩の村は荒れ果て、借金で苦しみ、心も荒んでいました。尊徳は、まず人々の心を立て直すことから始めました。心が復興すれば、自然と体が動き、田んぼや畑も蘇る。心の田んぼが潤えば、現実の田んぼも再生するという考え方です。

尊徳の働きで小笠原藩は見事に復興し、その評判を聞いた他の藩も次々と助けを求めるようになりました。その中には、福島県のいわきにあった相馬中村藩もありました。

その後、相馬中村藩は、大久保利通と渋澤栄一が対立する原因を作ります。結果的にこの出来事が、渋澤栄一が明治新政府を辞めるきっかけにもなりました。少し話が飛びますが、最終的には繋がっていきます。

具体的な話を少々致します。ある日、西郷隆盛が突然、渋澤栄一の家を訪ねてきました。その様子は、渋澤家の一族である渋澤秀雄さんが書き残した本に記されています。

西郷は玄関先で「西郷吉之助と申すものでござす。渋澤栄一殿はおられますか」と名乗りました。家の者が留守にしている事を伝え、では、帰るまで待たせていただきますと、ずっと立ったまま待っていたといいます。

西郷隆盛は、人の家を訪ねたら、相手が帰ってくるまで動かない人でした。疲れたらその場で横になることもありますが、主人が必ず帰ってくると信じ、決してその場を離れないのです。主人が帰宅し待っていた旨を伝え、訪ねられた側は、お待たせして申し訳ありませんと恐縮し、西郷はいやいや、恐縮せずに…そんな感じで話が始まります。

西郷は、「いま明治新政府では廃藩置県を進めていますが、相馬藩にはとても立派な法律があります。二宮尊徳の教えをもとに作られた“興国安民法”というものです。国を興し、民を安んじると意味のこの法律は、困っている藩を救う為のすばらしい仕組みです。廃藩置県によってこれを失うのは惜しい。どうか渋澤さんの力で、この相馬藩の宝ともいえる法律を残してもらいたいという依頼に参りました。」

しかし、渋澤栄一は即座に断りました。

「今の日本には、相馬藩だけでなく全国に二宮尊徳の“興国安民法”の精神が必要です。私一人が特定の藩のために動く余裕はありません。どうか、西郷さんのお力で、この精神を日本全国に広めてください」

こうして、具体的に相馬藩の法律を残すという話は、いつのまにか立ち消えになってしまいました。帰り際、西郷は相馬藩の法律を残してくれと頼みに来たつもりが、今日は叱られに来たようなものと笑いながら帰った、と渋澤栄一のお孫さんが書いた本に残されています。

いずれにしても、そうした出来事後、すぐ国の予算を決める重要な会議が開かれました。今でいう国会の予算審議にあたる会議です。

当時、正式な内閣総理大臣という肩書きはまだありませんでしたが、その役割を果たしていたのが大久保利通です。渋澤栄一は、今で言う財務省の事務次官にあたる大蔵省事務次官として、国の財政を実質的に取り仕切る立場でした。

その予算会議で、大久保利通は日本が非常に厳しい状況にあることを述べ、まずは軍事予算を優先的に確保すべきだと主張しました。そして、他の議題に先立って軍事予算の承認を求めましたが、その場では誰も異論を唱えませんでした。沈黙が続く中、渋澤栄一が発言し、予算のあり方そのものに意見を述べます。

彼は、まず収入の見通しを立て、その範囲内で支出を考えるべきだという考えを示しました。「入るを量りて出づるを制す」どのような組織や家庭でも、支出

を先に決めるのではなく、実際どれだけ収入があるのかを把握してから使い道を定めるのが本来の道であるという考え方です。

渋澤栄一は、大蔵事務次官としての立場から、日本の収入は現在確定しておらず、明確な数字が出ていないと説明しました。そのような状況で軍事予算だけを先に決めるのは本末転倒であり、財政の基本原則に反するとして、大久保利通と反対の意見を述べたのです。

この発言に対して大久保利通は強く反論し、両者の意見は大きく対立しましたが、渋澤は自らの信念に基づいて国家財政のあり方を主張し続けました。この議論の後、渋澤栄一は明治新政府の職を辞しました。

渋澤栄一は、辞職にあたって井上馨と相談し、辞めるなら一緒に辞めようと話し合いました。結果、感情的に辞表を突きつけるのではなく、少し時間を置いて辞めることができました。渋澤栄一が明治新政府を辞めるきっかけに二宮尊徳の考え方も入っていました。

あかぎ信用組合は、二宮尊徳の思想をもとにした「五常講」の考え方に基づいて金融活動を行っている組合との事でしたので、渋澤栄一と二宮尊徳のかかわりをお話しました。

かわ ほとり あ いわ ゆ もの か ごと ちゅうや お
川の上^{かわ}に在^{ほとり}りて曰^あく、逝^{いわ}く者^ゆは斯^{もの}くの如^かきかな。昼^{ごと}夜^{ちゅうや}を舍^おかずと。

(子罕第九 16)

これについては先程も触れましたが、学びという観点から解釈するのは少し無理があるように思います。自分も年を取ったものだなという方が良いだろうと思います。

この言葉から私が思い浮かべるのは、鴨長明の『方丈記』です。こちらの方が私たちには馴染みがありますね。方丈記の冒頭に「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」という一節があります。

最後の方には、「朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける」ともあります。鴨長明の言葉はしっくりきて良いですね。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」これはエネルギーの流れとしても解釈できるでしょう。前半はこれで終わります。有難う御座居ました。

(休憩)

後半に入りたいと思います。

では、鴨長明のことをお話します。
彼の若い頃を振り返ると、自然災害が沢山起きていました。23歳の頃、大きな火災、火災旋風が起こる大火事に遭っています。26歳の時には大きな竜巻にも遭遇しました。日本でも竜巻が発生することがあります。

京都にいた時、「遷都」といえる出来事も経験しました。現代でいえば、日本政府が東京から他の地域へ避難するような、政治的・社会的動きがあった訳です。それを体験したのが26歳の時でした。

その後大飢饉が起こり、人々が次々と亡くなりました。まさに地獄のような時代だったのでしょう。飢え死にする人が大勢いて、台風や火災、さらには伝染病、今で言えばコロナのような流行病まで広がりました。27歳の時には、そうした大飢饉の渦中にいたのです。

31歳では、大きな地震にも見舞われました。つまり、20代から30代前半にかけて、次々と信じ難い自然災害に直面したのです。

そのような出来事を受け止め、鴨長明は『方丈記』を書きました。多くの苦しみや悲しみを経験することで、それを自分の糧として人間を磨いていく。そんな事を川のほとりに関して想いました。

今日の新聞についてお話しします。前回は、この3倍から5倍くらいの新聞を持ってきたのですが、一言も話せなかったので、今日は新聞の話もしようと思います。

電車に乗った際、新聞を広げて読んでいる人は、車両を見渡してもまるでいません。自分でも、いかに古い人間なのかと感ずますし、少し異質に見えるかもしれませんが、私は新聞を広げて読みます。

今日は、朝日新聞で印象に残った記事がありました。その記事は、一面のトップに気候変動のことが取り上げられていました。参議院選挙で様々な課題があると言われているが、その根底には気候変動の問題があるという内容です。

一面に「気候変動」という見出しがあり、読み進めていくと、記事の最後にこう書かれていました。参議院選挙ではいろいろな主張が出ているが、全ての根っこに横たわっているのは気候変動の問題である。ところが、誰もその根本的な部分には触れようとしない。そういう指摘をしていました。私はその記事を読んで、とても良い指摘だと思いました。

朝日新聞を褒めるなんて、これまであまりなかったことですが、今回はなかなか良い記事が多かったです。

一面ではありませんが、日銀の動きについても朝日がしっかり書いていました。日銀は異次元緩和の一環として、金融システムを安定させるために銀行が保有する株式を買い取ってきました。合計で2兆円ほど買い入れたそうですが、それをすべて売却し、完了したという内容でした。

他の新聞はこの点にほとんど触れていませんでした。問題が起きたときだけ大きく報じるのではなく、こうして一区切りがついたことも伝えるべきだと思います。日銀が今後どんな手を打つか、引き続き注目しておく必要があります。

もう一つ印象に残ったのは、朝日新聞の群発地震の記事です。トカラ列島周辺で、体に感じる地震が1801回もあったという内容でした。きちんと地図を載せて、どこで起きているのかひと目で分かるようにしていたのが良かったです。珍

しく3つの記事を褒めてしまいましたが、他の新聞はあまり印象に残るものはありませんでした。

気になったのは中国の話題です。読売新聞に、習近平氏が体調不良を理由に行事を欠席しているという記事がありました。こうした体調不良という報道が増えるときは、大抵、退陣や政変の前触れとも言われます。暗殺未遂や政敵を排除したような動きは報じられませんが、活動の減少が気になるところです。

また、読売が11日と12日の一面で、中国が日本を取り込もうとしているという記事を掲載していました。トランプ大統領の関税問題で日米関係が揺れる中、中国が牛肉の取引などを通じて日本を引き込もうとしているという内容です。

新聞で気になったのは、大体そのあたりです。トランプさんの話もしておいた方がいいかもしれませんね。

少し前の北関東フォーラムで、話を始めようとした所、開始挨拶に立った方からトランプさんを分析して下さいという質問が出ました。そこでトランプ分析の話をしましたが、その時の事を、少しだけお話しておきます。

トランプさんはグローバリズムにとどめを刺す役割を担って登場した人だと考えています。

世界は長い間、グローバリズムのもとで動いてきました。日本で言えば、日本で作ったものを遠い国へすぐ売る、遠い国で作ったものをすぐ日本で買えるという仕組みです。

例えば、最近ニュースでサンマが1匹5万円するという話が出ていました。もし日本でサンマが獲れたとして、これは美味しいからアフリカやアメリカで売ろうと思えば、すぐに輸出して売れてしまう。これがグローバリズムの世界です。

同じように、アメリカではトランプ関税の影響で、安く良い車が作れるようになったとして、それを日本に直ぐ売りたい。こうしたどこで作っても、世界のどこでもすぐ売れる仕組みが、グローバリズムでした。

しかし、今やその仕組みは限界に来ています。もうグローバリズムは成り立ちません。トランプさん自身はグローバリズムを壊そうとして出てきたわけではなく、アメリカ・ファーストの立場から行動していましたが、結果的にグローバリズムの終焉を告げる存在になったと見ています。

ですから、私のトランプ分析の第一はグローバリズムの破壊です。これは北関東フォーラムでお話しした内容として掲載されていますので、ぜひお読み下さい。

トランプさんの役割の一つ目はグローバリズムの破壊だとお話ししました。二つ目は、グローバリズム破壊による世界の分断です。グローバリズムが崩れると、国や地域ごとに新しい連携が生まれます。学者の中には、それを文明圏という言葉で説明する人もいます。これからの世界は、アメリカはアメリカ圏、ヨーロッパはヨーロッパ圏、そして、アジア圏、アフリカ圏というように、いくつかの文

明圖に分かれていくという考え方です。

その中で、日本は特に珍しい存在です。日本一国だけで独自の文明圏を構成できる、世界でも特殊な国だと評価されています。

これからの世界は全体がひとつではなく、地域ごとにつながる時代に入っていく。日本で言えば、いわば地産地消のような感覚です。その国で作り、その国で食べる。そういう形が主流になっていくのだと思います。

アメリカの転落については、木内信胤先生が30年以上も前にアメリカは凄まじい勢いで衰退を始めていると指摘しておられました。興味があれば、木内先生の著作なども調べてもらおうと良いと思います。

トランプさんの分析としてまとめるなら、彼自身は無自覚かもしれませんが、アメリカを“世界のアメリカ”から“普通の国アメリカ”へと変えていく役割を果たしていると思います。

もちろん、アメリカは依然として強大な国ですが、それでも一段落してみれば、アメリカ・ファーストとは、世界の中心から一国としての強さに戻ることを意味していると考えます。つまり、アメリカを一つの強国へと地に下ろす、それがトランプさんの三つ目の役どころだと私は思います。

それに伴って、日本はこれからどうなるのか。前からお話ししているように、日本は今、転落の速度をどんどん増しています。私は、この流れが飢餓死する人の出現で一度底を打つと思っています。

もし国内のあちこちで飢餓死が起きるようになれば、一体行政は何をしていたのかという話になります。生活保護の減額なども、結局は国の判断の誤りです。そうした行政や政治の機能不全が飢餓死という形で表れたとき、日本の転落は底に達し、そこからようやく再生が始まると思います。

どれだけの犠牲を払うのか。戦争や国際的な混乱に巻き込まれて亡くなる人も出てくるかもしれません。中東やウクライナのような状況が、日本でも起こらないとは言えません。多くの死者の出た時が、日本の転落の終わりだと考えています。

歴史を見ても、江戸時代には飢饉が多くありました。そのとき幕府はサツマイモを導入し、飢えを防ごうとしました。終戦直後も、飢えで亡くなった裁判官がいました。日本は何度も「飢餓」を乗り越えてきた国なのです。

ですから、今の私たちも「どうすれば飢え死にしないか」を真剣に考える必要があります。まずできることは、プランターや家庭菜園など、小さくても自分で食べ物を作ることです。私は会社でも、フレコンバッグに土を入れてどれくらい収穫できるかを試しています。次は家庭菜園、さらに農園へと広がっていくつもりです。

これは時間との勝負です。まだ尻に火がついたとまでは言えませんが、いよいよ危機感を持ち始める時期に入ったと思います。

恒例の質問

恒例の質問に参ります。今の様な時代だからこそ、一人ひとりが考えるという事を政府もやらなければならない時期に来ています。それほど今は激動の時代だということです。

私は、今年を挑戦の年だと申し上げています。挑戦の年というのは、まさにジェットコースターのように上がったり下がったりする激しい時期ということです。でも、ジェットコースターで落ちている時は、実はまだ落ち切っていない。やがて、上昇気流に乗って一気に上がる瞬間が来ます。

だからこそ大事なものは、落ちないように頑張ることではなく、上昇のタイミングを感じ取って準備することです。上がり始めたときにしっかりその流れに乗れば、一気に伸びていくことができます。そういう意味で、私は今とても良い時代に入ったと思っています。

これからは、自分の努力や意思次第で、家族や子孫の未来、地域全体、あるいは所属する団体の行方まで変えられる。そう考えると、今こそ大きなチャンスが来たと言っていいでしょう。

さて、今は7月です。皆さんはこの挑戦の年を、どのように考えて過ごしておられるでしょうか。

- 良い日が今年は続いておられる方
- 嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方
- 有難うと言いつけているし、有難うと言われ続けている方
- 身体の手入れをよくやっていると思う方
- 自分磨きをよくやっていると思う方
- 昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

お時間になりましたので、終了とさせて戴きます。本日は有難う御座居ました。